

藤原清輔の詠歌

——特に、万葉歌の受容について——

芦 田 耕 一

はじめに

平安時代末期の六条藤家清輔（一一〇四年～一一七七）は今までともすれば歌学者ということだけが強調され論じられてきた。しかし、藤原定家『近代秀歌』に、「近き世」の歌人として源経信、源俊頼、藤原顕輔、藤原俊成、藤原基俊と共に清輔を上げているように、歌人としてもけっして等閑視できない人物である。ところが、彼の詠歌についての検討はほとんど行なわれず、わずかに仁平二年（一一五二）ころ成立の『久安百首』出詠歌を対象に立論した加藤睦氏の高説や清輔本『古今集』が彼の詠作にどう関わっているかをみた拙論⁽¹⁾ではなからうか。前者は「注釈的に検討し、その詠歌の実態を明らかにする」ことがねらいであり、後者は清輔本『古今集』の本文に拠って詠まれた例歌を上げて、本文の優秀さを誇示する意図があつたのではないか、と論じた。

この小論においては、『万葉集』歌を主なる例として取り上げ、これを清輔はどう受容して彼の詠作に生かしたか、その実情を述べてみたい。ここに清輔の詠歌技法を窺知することができると思うのである。そもそも当時は古語尊重という時代風潮であり、そして祖父顕季が六条藤家の象徴となつた「人丸影供」を催行し、また顕季の、

歌読ハ万葉ヨク取マデ也。是ヲ心得テヨク盗ヲ歌読トス（袋草紙・上巻）

という立言にみられるような環境に清輔は生まれ育つたのである。彼自身も『無名抄』「清輔宏才事」の勝命の言に、

晴の哥よまんとは、「大事はいかにも古き集を見てこそ」といひて、萬葉集を返々見られ侍し。

とあるように『万葉集』を座右の書としていた。さらに何よりも一条院御本『万葉集』は清輔が訓をつけた(次点)と伝えられている。

平安末期の『万葉集』訓読については、顕昭『袖中抄』第二十に拠れば、一一九三番歌の第四句「居名之湖尔」の「湖」の訓みについて、

或ハウミトヨミ 或ハウラトヨミ 或ハシホトヨミ 或ハミナト、ヨミ 或ハミヅウミトヨメリ

とみえるように、一定していなかったのが実情である。また、清輔自身の訓みも大部分が不明であり、推測するにしてもおのずと限界がある。そこで、いま仙寛本『万葉集』中最古の写本である西本願寺本に拠っておくが、清輔自著の中に彼の訓みかと考えられるものをできるだけ見付け出し、いちいち上げていくようにしたい。そして清輔の歌については、総数で約六〇〇首現存するといわれているが、晩年の自撰と一応説かれていることを重視して、『清輔朝臣集』所収の四四四首をその対象とする。このように絞ってみても所論に大過はないと思う。

一

清輔詠で『万葉集』の影響をうけたとおぼしいものはおおよそ五十数首くらいあり、『清輔朝臣集』所収の約一割強となるが、これを多いとみるか少ないとみるかは見方の分かれるところである。この中に、次に上げるような方法で詠まれている歌が多くある。

391 おく山のしたひがしたに鳴くとりのおとにもいかで人にきかれじ

「述懐百首のうち」にある。これは『万葉集』卷十の、

392 あき(かな)やまのしたひがしたになくとりのかゑだにきかばなにななげかむ⁽³⁾

に拠ることは確実であろう。上句全体がほぼ同じ措辞であり、「音」や「声」を起こす序として機能している。しかし、

万葉歌は「秋相聞」、清輔詠は述懐歌であり、おのおのの詠まれ方はまったく違っている。

231 あふことをいなさほそ江のみをつくしふかきしるしもなき世なりけり

歌題は「恋」。『久安百首』出詠歌であり、のち『千載集』恋四に入集する。これは、巻十四の、

330 とほつあふみいなさほそえのみをつくしあれをたのめてあさましものを

の影響下にあるといつてよいだろう。『久安百首』以前の成立とされる『奥義抄』「出萬葉集所名」項の「江」に「いなさほそ江」とある。「いなさほそ江のみをつくし」は清輔以前に用例を見出せない。万葉歌が「とほつあふみいなさ」であるのを、「あふことをいな」として「いな」を掛詞にしたのが趣向である。そして「みをつくし」も掛詞であり、「いなさほそ江のみをつくし」が「ふかき」を導く序ともなっている。身を尽くしても相手が応じてくれない恋の嘆きを詠むのに対して、万葉歌は相手の不実を責めている。

28 わが門のいつもと柳いかにしてやどによそなる春をしるらん

「柳」として詠まれる。これは巻二十の、

444 わがかどのいつもとやなぎいつもいつもおもがこひすすなりましつしも

に拠つていよう。万葉歌は『和歌童蒙抄』にみえ、初句「わかやどの」とある。初、第二句は清輔以前に見られない詞句である。万葉歌は、初め二句が第三句を導き出すための同音による序であり、防人が母を慕う歌となっている。

一方、清輔詠は同じ詞句を序として機能させることなく、内容的には主人の沈淪を詠んでいる。

万葉歌一首だけを基にして詠んだ単純な三例を上げてみたのであるが、この限りにおいては、本歌にごく近い形ではなく、何らかの点で異なった風に詠んでいることにその特徴があるといえよう。これらは、『奥義抄』「盗古歌証歌」項に例として上げる、『万葉集』の

396 まちかねてうちにはいらじしるたへのわがそでの上に（西本願寺本「わがころもでに」）しもはおきぬとも（西

本願寺本「つゆはおきぬとも」）（巻十一）

と『古今集』恋四の、

693 君こずはねやへもいらじこ紫わがもとゆひにしもはおくとも
 という関係とはおおよそ様相を異にしているといえよう。

二

以下において、『万葉集』を中心に、万葉歌や他の歌何首かとをいわば合成させて一首を詠作した例歌を上げている。清輔がいかに万葉歌に馴染んでいたかがよく分かり、また彼の才気を窺わせるに足りるものである。

226 おのづからゆきあひのわせをかりそめにみし人ゆゑやいねがてにする

「恋」として入る。『久安百首』出詠歌であるが、第五句は「いねがてにせん」。「わせ」「かり」「いね」が縁語になっている。

加藤氏は次の三首からの影響を指摘する。

IIIをとめらにゆきあひのわせをかるるときになりけらしもはぎのはなさく(卷十)

『袖中抄』第十九は同じ訓みである。「ゆきあひのわせ」は清輔以前に見出せない辞句であるが、『久安百首』以後の成立である『和歌初学抄』(以下、『初学抄』とする)の、別称や類義語を集めた「物名」項に「稻……ユキアヒノワセ」と見え、清輔が関心を払う語であると考えられる。清輔詠は、本歌とは違って「ゆきあひのわせを」が序になっており、これは本歌の「わせをかる」からヒントを得たものであろう。そして、「ゆきあひ」には「出会い」の意が込められている。

二首目は、

III ゆふづき(く)よあかつきやみのほのかにも(ぼのに)みしひとゆゑにこひわたるかも(卷十二)
 であり、第四句が似る。いま一首は、

III ゆふざればきみきますやとまちしよのなごりぞいまもいねかてにする(卷十一)

ともに相聞歌である。『久安百首』出詠時の「いねがてにせん」を、家集に入れるに際してより万葉歌に近づけたといえよう。

これら三首を取り合わせることで、一首にまともな上げた感のある作品であるが、内容の面では、清輔の歌は三〇一七番歌にもっとも近いものの、出会った状況や煩悶の様子が違っている。辞句をつなぎ合わせることで、どの本歌からも拘束されることはなく、比較的自由に作り得たかと思われる。しかし、このことは古語の羅列という印象を強く与える結果となり、古風な感じの歌と評価されることになるであろう。

次は、「恋」として見える、

249 河千鳥なくやさはべのおほる草すそうちおほひ一夜ねにけり

である。「河千鳥」は『万葉集』に二例、私家集には清輔以前に見られるが、勅撰集では『玉葉集』初出という、それほどありふれた歌語ではない。「おほる草」は八代集にはまったく見出せないが、これらは『万葉集』に典拠を有する。まず、前者については、

淵かはちどりすむさはのうへにたつきりのいちしろけむなあひいひそめてば(卷十一)

淵よくたちてなくかはちどりうべしこそむかしのひともしのひきにけれ(卷十九)

とある。相聞歌と河千鳥の鳴き声を称賛する歌である。初めの第二句「すむさはのうへ」は「住沢上」と表記されており、『初学抄』の、詠歌の参考とすべき古い詞を集める「古歌詞」項の「萬葉集」に「すむやさはべ」と見える。次点を付したとされる清輔は『興義抄』等を見ると、かなり特異な訓みを施していると思われるので、彼がこのように訓んでいた可能性は大いにあるだろう。そして、清輔は「すむや」の代りに、四一七一番に拠って「なくや」と詠んだのであろう。後者の「おほる草」については、

淵かみつけのいならのぬまのおほるぐさよそにみしよはいまこそまされ(卷十四)

に拠っている。相聞歌である。『興義抄』「出萬葉集所名」項の「江」に「いそらのぬま」があるが、『万葉集』にはこの名が存せず、あるいは「いならのぬま」の誤写か。これは「伊奈良能奴麻」と表記されており、よみ間違えるは

ずがない。清輔はこの歌を知っていたといえるだろう。

第五句はそれほど珍しい表現とも思われませんが、あるいは、『古今集』仮名序に引かれる万葉歌の、

III はるののにすみれつみにとこしわれぞのをなつかしみひとよねにける (巻八)
に倣っているかもしれない。

この歌においても、内容の面で本歌に似せることもなく数首の詞句を合わせて一首にまとめ上げたといえる。その折に、先行歌の句の運びを襲用した。従ったのは『古今集』恋一の、

469 郭公なくやさ月のあやめぐさあやめもしらぬこひもするか

である。初句に鳥、第二句に「なくや」、第三句に草、と形の上でも似ており、同音反復で「あやめぐさ」が「あやめ」を導き出すように、「おほる草」が「すそうちおほひ」を引き出すことまでも同じである。

次は、「寒夜千鳥」とする、

214 ひさぎおふるあそのかはらの川おろしにたぐふち鳥の声のさやけさ

である。「ひさぎおふる」「ち鳥」には次の歌が影響を与えているだろう。

930 ぬばたまのよのふけゆけばひさぎおふるきよきはらにちどりしばなく (巻六)

『初学抄』には、「古歌詞」項の「萬葉集」に「ひさぎおふるきよきはら」と上がる。「きよきはら」の代わりに「あそのかはら」と歌枕をもつてきて変化をつけたのであろうが、この語は『万葉集』に見出すことができる。

III しもつけのあそのかはらよいしふまずそらゆときぬよながこころのれ (巻十四)

東歌の相聞である。『奥義抄』「出萬葉集所名」項の「河」に「あそのかはら」とあるが、この語はこれ以降清輔ころまでまったく用いられていないのである。

この歌で一番問題になるのは第五句である。

III このころのあきのあさけにきりがくれつまよぶしかのおとのはるけさ (巻十)

この万葉歌の第五句は「音之亮左」と表記されており、現代では「声のさやけさ」と訓まれている。『校本萬葉集』

に拠れば、次点本の「元暦校本」「類聚古集」は「亮」が無く、「神田本」は「亮」が「毫」とある。訓みについては、「元暦校本」「類聚古集」は「おとのはるけさ」であるが、前者は「はる」の右に墨筆で「サヤ」、後者は「はる」に朱筆の合点があり、その右に朱筆で「サヤ」とある。これは「音のさやけさ」という異訓のあることを示している。そもそもこの歌は、『古今和歌六帖』第二に、第四、五句が「つまよぶしかのおとのさびしさ」、十二世紀初めの成立である『綺語抄』下に「つまこふしかのおとのともしさ」とあり、訓みが一定していないのである。そして、書陵部蔵『柿本集』(五〇一・四七)には、

114 この比のあきのあさけのきりがくれ妻よぶしかのこゑのさやけさ

と見え、「こゑの」も含めて第五句が清輔詠と全く同じである。この『柿本集』は最初から一八四番まではほとんど『万葉集』巻十から採られている。清輔の万葉歌の訓みは特異なものが見られると述べておいたが、「音」を「こゑ」とよめば(実際この例は多い)、こゝもその可能性がないわけではない。しかし、『柿本集』のことが清輔の著作に類出することからすれば、これに従ったものかとも思われる。特に、「鳥の声」については、清輔は、

391 おく山のしたひがしたに鳴くとりのおともいかで人にさかれじ

と詠んでおり(前出)、ここに「とりのおと」とすることからみれば、万葉歌の清輔の訓みは「おとのさやけさ」であったかと推測できよう。にもかかわらず、「声のさやけさ」と詠んだのは『柿本集』に做ったためではなからうか。

「さやけさ」については、『初学抄』の、歌語を抄出し簡単な説明を施す「由緒詞」項に「さやけし 清也」とあるので、清輔好みの語であったと思われ、「さやけし」に執したのはそのあたりにあるうか。

ところで、万葉歌の九三〇番歌に拠って顕季は次のように詠む。『六条修理大夫集』に、
242 よくたちにちどりしばなくひさぎおふるきよきはらにかぜやふくらん

とある。清輔は当然これを知っていただろう。しかし、彼は『万葉集』一首だけに拠り、しかも句順を適当に変えただけではもの足りず、他の万葉歌等を用いて一首にまとめ上げたのである。内容の面では、万葉歌の九三〇番歌が千鳥の鳴く理由を問題にするように、顕季も千鳥が鳴くのは風のゆえだと詠む。これに対して、清輔詠は川風に伴って

聞こえてくる千鳥の声の「さやけさ」が眼目になっている。

この清輔詠に似る歌がある。『源三位頼政集』の、

280 あづまめとね覚めてきけば下野やあその川原に千鳥なくなり

であり、「河辺千鳥」として入る。この詠作年時は不明であり、両詠の先後関係も分からないが、「あその川原」は清輔ころまで見えないことから、あるいはこれを出詠の折に二人はあらかじめ作品を提示し合っていたことがあったのかも知れない。清輔と源頼政は同い年であり、歌林苑の会衆であった。頼政詠はただ東女と千鳥の声を聞いたというもので、清輔詠の方がやはり秀れた歌になり得ている。

三

ここにおいては、『万葉集』歌を二首合わせて詠じた例を上げてみよう。

220 ひくま野にかりしめさしあさぢ原雪のしたにて朽ちぞはてぬる

「野徑寒草」として入る。『夫木和歌抄』巻二十二に拠れば、詞書に「承安二年（一一七二）閏十二月東山歌合、日雪」と見え、第二句は「かりしめさせる」。この歌合の主催者は藤原教長である。歌枕「ひくま野」は清輔以前のろいろな詠み方がなされている。

26 はるがすみたちかくせどもひめ小松ひくまの野辺に我はきにけり（『金葉集』三奏本・春。大江匡房作。『堀河百首』に出詠）

幽ひくまののかやが下なるおもひ草また二心なしとしらずや（『堀河百首』藤原仲実作）

121 たづねくるひくまの野辺にみだるるやよるかたもなくあそぶいとゆふ（『為忠家初度百首』藤原盛忠作）

歌題はおのおの「子日」「思」「野外遊糸」であるが、清輔のような組み合わせで詠まれているものはない。清輔がこれらから思い付いて詠んだとするよりも、当歌以前に成立の『奥義抄』『出萬葉集所名』項の「野」に「ひくまの」、

『初学抄』『古歌詞』項の「萬葉集」に「ひくまのに、ほふはぎはら」とあることから、『万葉集』を見ていたと考えられる。該歌は、

57 ひくまのにほふはぎはらいりみだるころもほはせたびのしるしに（卷一）

である。しかし、『初学抄』が既に上げているにもかかわらず、「にほふはぎはら」を詠み込まず、ただ「ひくまの」だけを用いているのである。実は、第二、三句も万葉歌に倣っている。

瀧あさちはらかりしめさしてそらこともよせてしきみがことをしまたま（卷十一）

相聞である。初め二句に異訓はない。この部分、『初学抄』『古歌詞』項の「萬葉集」に「あさちはらかりしめさして」とある。「にほふはぎはら」よりもこれに拠って詠歌したのは——句順を逆にしてはいるが——、一に清輔の好尚に關っているだろう。このように、既に『興義抄』や『初学抄』に上げた語を詠み込むことは、清輔の所論を強調する意味でも必要不可欠であった。そして、内容の面では、万葉歌二首に何ら従うことはなく、詞句だけを借用したものであり、これも今までと同じ方法である。

次は、「冬夜」として見える、

221 君こずはひとりやねなん篠のはのみ山もそよにさやぐ霜よを

を論じたい。『久安百首』出詠歌であり、第三句は「ささの葉の」とある。のち『新古今集』冬に「ささの葉の」で入集する。群書類従本、国歌大系本そして諸写本の『清輔朝臣集』も第三句『久安百首』等と同じ。平安時代や鎌倉時代の辞書類は「篠」を「ささ」としており、この「篠のは」も「ささのは」と読むべきである。⁶⁾この歌は次の万葉歌を思い浮かべての作であろう。

133 ささのははみやまもさやにみだれどもわれはいもおもふわかれきぬれば（卷二）

別れてきたばかりの妻を思う歌である。第三、四句が万葉歌の初、第二句と類似するが、「さやに」が「そよに」とある。『初学抄』『古歌詞』項の「萬葉集」に「さ、のは、み山もさやにみだるれど」と見える。清輔はこの部分を詠むに際して、なぜ「そよに」としたのであるか。「さやに」と「そよに」に大きな意味の違いはなく、そして「さ

やにさやぐ霜よを」となり、調子も良い。「さやに」は「清爾」と表記されており、次点本の「元暦校本」には「そよに」という他とは異なる訓があり、その右に朱筆で「サヤ或本」と書き込まれている。「元暦校本」は清輔甥の顕家（重家息）が校合したものとされており、清輔の訓みをそのまま伝えていることも考えられる。そして、前出の書陵部蔵『柿本集』（五〇一・四七）には、この万葉歌が、

216 さ、のははみやまもそよにみだるめりわれはいもおもふわかれきぬれば
とあり、ここにも「そよに」の本文が見える。また、『新編国歌大観』所収『柿本集』も「そよに」である。

このようにみれば、清輔が「そよに」と訓んでいた蓋然性は高い。それにしても『初学抄』になぜ「さやに」とあるのかは分明でない。

次に、第五句「さやぐ霜よを」という措辞を検討してみよう。加藤氏が指摘するようにこれも万葉歌が念頭にあったと思われる。

櫛ささがはのさやくしもよにななへかるところにませるころがはだはも（巻二十）

重ね着にまさる共寝のあたたかさ詠む。初句に「笹が葉」とあることにも注意したい。この万葉歌に類するものに、

『六条修理大夫集』の

238 さむしろにおもひこそやれささの葉のさやぐしもよのをしのひとりね

があり（加藤氏は指摘していない）、祖父詠は当然清輔の脳裏にあつただろう。これは『金葉集』冬（二度本）に入集するが、第四句「さゆるしも夜の」とあり、万葉歌や清輔詠と異なる。顕季詠は先行歌を参考にしたと考えてよいだろう。そして次のような『古今集』歌がある。

聞さかしらに夏は人まねささのはのさやぐしもよをわがひとりぬる（雑体）

鴛鴦の独り寝でない違いはあるが、顕季詠の本文と通じており、顕季はまた『古今集』詠をも意識していたであろう。この第三、四句は『初学抄』『古歌詞』項の「古今集」に「さ、のはのさやくしもよ」と出、清輔の注目する措辞であった。

このように、「さやぐ霜よ」について、たとえ頭季詠や古今歌を介してであったにせよ、万葉歌が清輔の意識裡にあつたとしておいても大過はないであろう。なお、加藤氏は清輔詠の第二句を、『万葉集』の、

74 みよしののやましたかぜのさむけくにはたやこよひもわれひとりねむ（巻一）

の第五句に拠るとしているが、古今歌の第五句に倣っていると解した方がよいであろう。

次は、「愁ふる雑歌のうち」と詞書のある五首中の、

396 ふるさとをしきしのぶるもあやむしろをになる物といまぞしりぬる

である。第二句は『万葉集』に見える。

524 にはにたつあさでかりほししきしのおあづまをとめ（をうな）をわすれたまふな（巻四）

これは『興義抄』『古歌萬葉集』項に、第四句「あづまをんなを」として引かれており、詠まれた状況と「あさで」の意味を述べている。共に見える「しきしのぶ」は「布暴」を「布慕」と誤写したことにより生じた歌語とされており、「頼りにししのぶ」の意。現代は「布暴」に従って「ぬのさらす」と訓む。これは清輔以前にも詠まれており、たとえば『堀河百首』の源俊頼詠に、

114 あさでほすあづま乙女のかや菴敷きしのびても過す比かな

とあり、『散木奇歌集』恋上や『千載集』恋三にも入る。これは万葉歌と「あさでほす」「あづまをとめ」「しきしのぶ」が共通しているが、上句が「敷き」に掛かかっていく序となっており、万葉歌とはこの点で異なる。そもそも俊頼は万葉歌に依拠することがよくあり、いわば陳腐になった三代集の表現に代わって用いたということなのである。清輔はこの歌を知っていたと思う。

他に、「しきしのぶ」は『久安百首』に出詠された次の二首にも見える。

377 あさでかりしきしのびけむあづまめも我が恋ばかりおもひけむやぞ

作者は清輔父頭輔である。万葉歌と三句にわたって同一であり、また同じように恋の歌となっている。

380 しき忍ぶ床だに絶えぬなみだにも恋はくちせぬ物にぞ有りける

俊成作であり、のち『千載集』恋五に入集する。これは初句にしか万葉歌の影響は見られないが、恋の歌であることは万葉歌と同じである。

清輔詠の制作年時が明確でないことから、後の二首との影響関係ははっきりしない。ただ、俊頼の歌を知った上であれ、清輔が二、三十歳代の比較的若いころに『奥義抄』にこの万葉歌を引いて注を付しており、しかも万葉歌の下句を承けて「ふるさとをしきのふる」と詠んでいるように思えるので、これを踏まえているということは言えるだろう。

清輔の「あやむしろをになる物と」いう言い回しも『万葉集』に拠り所がある。

淵ひとりぬと（ぬる）こも（とこ）くちめやもあやむしろをになるまでにきみをしまたむ（巻十一）

「あやむしろ」は『初学抄』『物名』項に「筵 アヤムシロ」と見えている。

このように、俊頼等が万葉歌一首だけに拠っているのに対して、清輔は二首を取り合わせて詠作し、また、俊頼等が相聞歌に倣って恋を詠んだのとは異なつて雑歌の述懐風にしたのが清輔の創意であろうと思う。

ところで、清輔詠に酷似する俊恵の歌がある。『林葉和歌集』恋歌に見える、

705しるらめや涙の床のあやむしろをになるまでにしき忍ぶとは

であり、詞書は「又、歌林、人人歌十首よみ侍りしに」。清輔詠とは三句まで共通している。「歌林」はいわゆる歌林苑のことで、これは俊恵が自坊歌林苑で催した歌人グループの歌会で詠まれたものである。これほどまでに似ることから、この歌会によく出席する清輔がこの折にも参加し、二人はあらかじめ相談していたか、作歌の途中で作品を示し合っていた可能性が高い。（承安二年（一一七二）催行の「公通家十首会」において、清輔と俊恵がことと同じように詠歌し合った事実をかつて論じたことがある⁹⁾）しかし、内容の面では清輔が雑歌、俊恵が恋歌であること、清輔詠が五首見えるのに対して俊恵詠は十首、などで異なっている。まず、前者については、『林葉和歌集』の詞書において、参加者が同じ歌題で詠み合った時には「師光君の家にて人人花歌読み侍りしに」（一一三）、「人人卯花のうた読み侍りしに」（二〇五）、「人人月歌十首よみ侍りしに」（四二八）のように必ず歌題が表記されており、当歌の詞

書とは違っている。このことから、参加者がおのおの異なった歌題で詠作したことは十分に考えられる。後者については、清輔詠の詞書は「……のうちに」とあり、何首か詠んだうちの一部という書き方であるので、ここに十首詠まれていても不思議ではない。

このようにみれば、清輔の方が俊恵より九歳年上でもあり、清輔に合成して詠歌する好尚があることから清輔の方が働きかけたといま考えたい。その際、俊恵の父俊頼の『堀河百首』歌の、特に「しきしのぶ」を詠み込むことを当初から意図していたのであろう。

この構図は次の例にもあてはまる。清輔の「七夕」の歌に、
99 あまの河水かけ草におく露やあかぬわかれの涙なるらん
がある。初、第二句の表現は『万葉集』の、

100 あまのがはみづかけくさのあきかせになびくをみればときはきぬらし（巻十）

から取っている。特に「水かけ草」は万葉歌にこの例しかなく、そして八代集には見出せない。清輔詠に類するものに俊恵の歌がある。『林葉和歌集』秋歌に、

352 あまの川水かけ草の夕露にそふさへあやな袖なぬらしそ

とあり、詞書は「師光の君家にて、七夕歌あまた人人読み侍りしに、十首」。歌題が同じで、初、第二句が同じ、さらに第三句に「露」を詠むことでも似る。主催者源師光は六条藤家や歌林苑に近い歌人であり、清輔が「あまた人」の一人であった可能性は高い。清輔と俊恵の間で相談し合ったのであろう。ここでも俊頼の歌が意識されている。『散木奇歌集』恋下に「寄草恋」として入る、

101 谷ふかみ水かけ草のした露やしられぬ恋の涙なるらむ

である。特に、清輔詠は創意がないくらいに内容も用語も詞つづきもそのまま襲っている。そして、歌題の関係から、俊頼詠にはない「あまの河」を詠むが、これは万葉歌が脳裏にあつてのことだろう。この歌会においても清輔が俊恵を導いたといつてよく、俊頼、俊恵父子を引き立たせる行為であったと思われる。

四

ここでは、『万葉集』一首に、万葉歌以外の歌とを組み合わせた例をみていこう。
「桜」の、

39 かざしをるみわの桧原の木のみよりひれふる花や神のやをとめ

の第三、四句に類するものは万葉歌に数例見える表現であり、たとえば人麿作の著名な、

139 いはみのうみうつたのやまのこのまよりわがふるそでをいもみつらむか（巻二）

があるが、「ひれ」と「そで」に違いがある。これは、『初学抄』の、複数の地名を詠み込んだ歌を上げる「両所ヲ詠歌」項にまったく同じ本文で見える。そして、第四句の類似だけでいえば、たとえば、

878 うなはらのおきゆくふねをかへれとかひれふらしけむまつらさよひめ（巻五）

がある。「まつらさよひめ」は『初学抄』『古歌詞』項に見え、この歌は『奥義抄』『古歌萬葉集』項に第三句「かへれとや」として上がり、松浦佐用姫の説明と地名起源を述べている。第三、四句で、これらよりも似るのが『堀河百首』に出詠された藤原基俊の歌である。

111 木の間よりひれふる袖をよそにみていかがはすべき松浦さよ姫

のち『千載集』恋四に入集する。万葉歌の、前述二首を下敷きにし、佐用姫と離別した大伴佐提比古の心になって詠んだものである。清輔が万葉歌を知っていたことは確実であるが、類似の程度からして基俊の歌に倣ったといま考え
ておく。

清輔詠の初、第二句は次の万葉歌から取ったのであろう。

111 いにしへにありけむひとわがごとかみわのひはらにかざしをりけむ（巻七）

『拾遺集』雑上に第三句「わがごとや」として入集する（『拾遺抄』には見えない）。『初学抄』『古歌詞』項の「萬葉

集」に「みわのひばらにかざしをりけむ」とあり、清輔好みの表現であった。これを句順を逆にして詠み入れたのである。また『興義抄』『出萬葉集所名』項の「原」に「みわのひばら」と見える。清輔詠は、三輪山周辺をいう「みわ」から大神神社を連想し、佐用姫の代わりに「神のやをとめ」を用いてその美しさを称賛したものである。また、万葉歌から「かざしをる」を枕詞的に転用したのもこの歌の眼目である。

この枕詞的表現は次の歌に継承されていく。『新古今集』雑歌中の、
Ⅷ かざしをる三輪のしげ山かきわけてあはれとぞおもふ杉たてる門

は同じように「三輪」にかかる。作者殷富門院大輔は清輔より二十数歳年少とされているが、歌林苑の会衆であることから清輔に倣ったものであろう。『続古今集』春上にある、

38 かざしをるみわのひばらのゆふがすみむかしやとほくへだてきぬらん

は初、第二句は清輔詠とまったく同じ。詞書は「建保四年（一一二六）たてまつりける百首の春歌」、作者は「入道前太政大臣」（藤原実氏）である。

次は「暁望山花」と題する歌である。

41 み吉野の水わけ山のたかねよりこす白浪や花のゆふばへ

内容からみて、群書類従本のように、「暁」は「晚」ではないか。これは承安三年（一一七三）八月十五日催行の「新羅社歌合」に「少輔君」として出詠されているが、清輔の代作と考えられている（同じ歌合に清輔はもう一首同じ人の代作をしている）。清輔最晩年の作である。この初、第二句が『万葉集』に拠っている。

Ⅸ かみさぶるいはねこしきみよしののみづわけやまをみればかなしも（巻七）

この制作年時以前に成立の自著に清輔は多くこれを引く。まず、『興義抄』『出萬葉集所名』項の「山」に「水わけ山ミヨシノ」、『初学抄』『萬葉集所名』項に「みよしの、水わけ山」、さらに『初学抄』『西所ヲ詠歌』項に第二句「いはねこしきき」として歌が上がる。そして「みよしの、みづわけやま」は清輔ころまで詠まれていないのである。しかし、「みづわけやま」だけならば承安三年以前に次のようにある。『平忠盛集』に、

1 けさみればみづわけやまをおしこめてかすみながるるはるはきにけり
 と出るが、制作年時は不明である。忠盛男の『平経盛集』にも、「家歌合」として、

4 ゆふがすみみづわけやまにふかければたつともみえずはなのしらなみ

と見える。経盛主催の仁安二年（一一六七）の歌合で清輔は判者を務めており、親しい間柄であった。これは経盛が自家に催した歌合とし、同じ折に出詠された『重家集』の配列や春題であることから承安元年春の催行と考えられている。これに拠れば、忠盛は既に没しており（一一五三年没）、経盛が「みづわけやま」「かすみ」を詠み込んだのは父に倣ったということになろう。いま一例「みづわけやま」を上げると、清輔弟の『重家集』に「按察のこはれしかば、十首題を」の「落花」に、

497 桜さくみづわけやまにかぜふけばむつだのよどにゆきつもりけり

がある。これは承安二年三十月に催された「大納言公通家十首会」の折の歌であり、清輔もこれに参加して出詠する。⁽¹⁾

これらを知っていたであろう清輔が万葉歌によつて「みよしのの」と付けたところが新奇といえようか。

清輔詠の第五句「花のゆふばへ」は彼以前に一例しか見出せない表現である。『散木奇歌集』春に「修理大夫顕季卿六条家にて、桜歌十首人人によませ侍りけるに」とする、

74 せりつみしことをもいはずさかりなる花のゆふばえ見ける身なれば

に見える。詠歌状況からして清輔はこの歌を知っていただろう。花が夕映えしている美しさを俊頼が詠むのに対して、花の夕映えの景色を水分山を越す白波に見立てているところが清輔詠の趣向であり、花を白波に見立てる経盛詠とも異なっている。万葉歌ともまったく視点が違うのである。ここに清輔独自の新しい一つの景に至り得たといえよう。

最後の例歌を上げよう。

149 紫のねはふよこ野にてる月はその色ならぬ影もむつまし

「月三十五首のなかに」とする歌群二十九首の中に入る。摂政藤原忠通が自邸に催した月三十五首を詠む歌会での詠

であり、参加者の一人の『重家集』の配列からおおよそ永暦元年（一一六〇）ころの秋、あるいは翌年の七月上旬の催行と考えられている。初、第二句の表現は『万葉集』の、

④ むらさきのねばふよこののはるのにはきみをかけつつうぐひすなくも（巻十）

から取ったものであろう。この歌会以前に成立の『奥義抄』「出萬葉集所名」項の「野」に「よこのムラサキノネハフ」と見える。第四、五句の詞句は『小町集』の次の歌に似る。

83 むさしのおふとしきけばむらさきの色ならぬ草もむつまじ

詞書は「見し人のなくなりしころ」である。これは『古今集』雑歌上の、

867 紫のひととゆゑにむさしの草はみながらあはれとぞ見る

を踏まえていることは明白である。『小町集』については、総数六十九首の清輔所持本を清輔甥の顕家が複写して架蔵していたといわれている。^④（現在この歌数を持つのは神宮文庫蔵本であるが、顕家本との関係は不明。この本に当歌は見出せない）そうであるならば、この歌を知っていた可能性はある。また、東宮学士藤原義忠が万寿二年（一一二五）五月五日に催した自歌自判の歌合に見える歌とも通じる。

15 なでしこのつゆににほへるませのうちはそのいろならぬくさもめでたし

歌題は「瞿麦句露」。下句が『小町集』に似ているが、『小町集』が十世紀から十一世紀ごく初期に成ったとすれば義忠がこれに倣ったことも考えられる。この歌は、『袋草紙』下巻に「義忠朝臣歌合」として三番（十番のうち）上がっているうちに見え、本文は第三句が「ませのうちに」とある。義忠は前述の『古今集』歌を踏まえたのだが、「心はあまりて詞のたらぬ也」と判じている。東宮学士という職からも分かるように、義忠は漢学者であるが、和歌にも通じて博覧強記の人物であった。この点、清輔と似ている。義忠は『袋草紙』にも頻出するが、特に、大中臣輔親が月次の使の途中客死した事を承ける形で、「義忠ハ為二大和守一之時、遊二浮吉野河一之間、入レ水死去」（上巻）と、いわば余分な話が挿入されているところに清輔の義忠に対する並々ならぬ関心を窺うことができる。

これら以上に清輔詠に似る歌が、これ以前成立の『久安百首』に見出せる。藤原俊成の、

808 紫のねはふよこののつぼすみれま袖につまむ色もむつまじ

であるが、初、第二、五句がほぼ同じ。万葉歌とも初め二句がまったく同じである。俊成は万葉歌を用い、『小町集』詠や義忠詠からの影響は明らかでないが、ともかく古今歌を踏まえて詠んだのである。清輔は、俊成詠以前成立の『奥義抄』からみて、もともとから万葉歌に熟知しており、さらに俊成のをも知っていたことは確かである。他の歌が紫草の關係で草花を対象とするのに対して、月を詠む意外性が清輔のねらいであつたと思われる。

おわりに

以上、『万葉集』を軸に据えて、清輔の万葉歌の取り入れ方や制作方法を検討してきたのであるが、本歌とした万葉歌はどういう基準で選択されたのであろうか。『奥義抄』『秀歌体』項に、

又内外典のふみ、ふるき詩歌もしは物がたりなどの心をもととしてよめる事あり。古歌の心、ものがたりなどは、古きことのみな人の知りぬべきならずはよむべからず。われは思ひえたりとおもへども、人の心えぬ事はかひなくなむある。

とある。古歌などに拠る場合には、人がそれを本歌としていることが分かるような周知の歌を踏まえなければならぬという。また、仁安二年（一一六七）八月の「大皇太后宮亮平経盛朝臣家歌合」において、判者の清輔は、

万葉集にありとても、いひならはさぬことはよしなし。

と評する。万葉歌であつてもよく理解してからでないと思つてはいけなさと、それを活用する場合の心得を述べている。『万葉集』がいわゆる市民権を得たであろう清輔当時において、これらの揚言は説得力をもっている。そして、『初学抄』のいわば序の部分で、

歌をよまむにはまづ題をよく思ひとき心うべし。花をよまむには花の面白く覚えむずる事、月を詠ぜむには月のあかず見ゆる心を思ひつゞけてをかしく取りなして、古き詞のやさしからむを選びてなびやかにつゞくべき也。

と述べる。これは詠作方法について清輔が論じた唯一の例であるが、当面の問題に限って言えば、「古き詞のやさしからむを選」ぶことを主張している。

これらは要するに、『万葉集』を本歌にする場合には、著名な歌を充分に理解鑑賞し、その上で優美な古い歌語を選び用いることが肝要だというのであろう。これだけの心構えを清輔は要求しているのである。これにほぼ適していると判断した詞句が『興義抄』や『初学抄』に取り上げられているのであろう。また、これらに見えている歌は大部分がそうとは明記されていないが、清輔が評価した歌ということになるのではないか。

清輔が歌を詠むに際しては、これらの詞句をまったく同じ形で、あるいは一部分だけを取り、または句順を逆にするなど、いつさい頓着せずに、特に『初学抄』の「古歌詞」「由緒詞」「物名」に上げたものを詠み込んでいるのである。そして、これを「なびやかにつゞ」け、つまりなだらかな詞の続け柄になるよう留意して一首にまとめ上げようとするのである。内容の面では、本歌を意識的にずらして詠むのがほとんどであり、これは周知の万葉歌を享受する人に強く印象付けるためであろう。そしてこれがいわば清輔の腕の見せ所でもあった。

このようにして詠まれた歌はどう評価されたのであろうか。少なくとも新しさをやや後の歌人には与えなかったようである。たとえば、鴨長明の『無名抄』の「近代歌体事」に次のように言う。現代の歌人は、歌が古されてしまったと認め、いったん古風に立ち返ってそこから出直して幽玄の体を学ぼうとしている。これを「中古」風の伝統に従っている人達が非難しているとし、具体的に源頼政、俊恵、登蓮と共に清輔を上げて、彼らを現代歌人達は無視できないと述べている。また、『後鳥羽天皇御口伝』には、

清輔される事なけれども、さすがにふるめかしき事時々見ゆ。

とあり、洒落れた趣はないが、それでも古風な雅趣が備わっていると評している。

そもそも六条藤家には古語尊重の傾向が強くあり、清輔が優美な古語を合わせて一首にまとめ上げるという技法なので、そこに目新しさを求めることが無理なのであろうし、清輔自身がけっしてこれを意図していたとは考えられないのである。

- 注(1)「藤原清輔の『久安百首』について」(『東京水産大学論集』第24号)。以下、加藤氏の論はこれに拠る。
- (2)「藤原清輔詠と清輔本『古今集』」(『島大國文』第二十一号)
- (3)括弧内は本文の左に付されている異訓である。以下同じ。
- (4)「古歌詞」の説明については、西村加代子氏「古き詞の時代を慕って」(山本一氏編『中世歌人の心』所収)
- (5)『私家集大成 中古』に拠る。
- (6)『新編国歌大観』の「索引」には「しのはの」としてあがる。
- (7)辻彦三郎氏「元暦校本万葉集と藤原顕家」(『藤原定家明月記の研究』所収)
- (8)久保田淳氏校注『千載和歌集』(岩波文庫)など。
- (9)「藤原清輔の「公通家十首会」への参加をめぐって」(『和歌文学研究』第六十四号)
- (10)萩谷朴氏『平安朝歌合大成七』三八三「承安元年〔春〕太皇太后宮亮経盛歌合」
- (11)拙論(9)に同じ。
- (12)松野陽一氏「平安末期散佚歌会考(1)——法性寺忠通家月三十五首会——」(『和歌史研究会会報』六十号)
- (13)浅田徹氏「六条家——承安と元暦頃を中心に——」(『和歌文学論集』平安後期の和歌)所収)
- (14)片桐洋一氏『小野小町追跡』

本稿の引用は、和歌は、特に断つたものを除いて、『新編国歌大観』に拠った。歌学書については、『袋草紙』上巻部は『袋草紙考証』(全二冊)(藤岡忠美先生、西村加代子氏、中村康夫氏、芦田耕一共著)、『無名抄』は日本古典文学大系『歌論集 能楽論集』、『袖中抄』は『袖中抄の校本と研究』(橋本不美男氏、後藤祥子氏共著)に拠る以外はすべて『日本歌学大系』より引用した。